教育研究発表会　教育実践部門　学校経営　研究発表要項
（2026 年 11 月 14 日　於：新潟大学教育学部附属新潟小・中学校）

研究主題

自己有用感を実感し、自尊感情の醸成につなげる学校運営

－ 学校運営協議会を通して －

新潟中央東・新潟市立上山中学校　校長　桑原　通泰（H 元年度）

【主張】

● 他者からの評価を基盤とした自己有用感を実感できる機会を意図的に増やすことで、他者とのより良い関係性が構築され、その積み重ねにより自尊感情が醸成される。

① 「自己有用感」は、人の役に立った、人から感謝された、人から認められたという自分と他者（集団や社会）との関係を自他ともに肯定的に受け入れることで生まれる自己に対する肯定的な評価であり、他者からの評価がやがて自己内評価を形成し自尊感情を高める。

② 人の役に立った、感謝された、認められたと感じられるのは心からの「ありがとう」に他ならない。「ありがとう」を伝える体験、「ありがとう」を伝えられた関係が自己有用感をはぐくみ、良質なコミュニケーションを提供する。

③ 純粋に「認める」声掛けとして機能する「ありがとう」の心がけを学校・地域全体で推進し、生徒の将来的なウェルビーイングの実現と、自らの目標と夢を持って主体的に生きる力の育成を目指す。

1 研究主題の設定理由

（1）理論的背景と自己有用感・自尊感情の重要性

これからの予測困難で複雑な社会において、生徒が自らの目標と夢を持って力強く生きていくためには、自分に自信を持ち、自分自身の存在や価値を肯定的に捉える自尊感情の醸成が不可欠である。国立教育政策研究所発行の生徒指導リーフ Leaf.18「自尊感情」？それとも「自己有用感」（平成 27 年 3 月）によれば、「自己有用感」とは「人の役に立った」「人から感謝された」「人から認められた」という、自分と他者（集団や社会）との関係を自他ともに肯定的に受け入れることで生まれる自己に対する肯定的な評価であると定義されている。同リーフでは、他者からの肯定的な評価の積み重ねがやがて自己内評価を形成し、根底にある自尊感情を高めていくというプロセスの重要性が示されている。

また、相手を「認める」声掛けは時として難しさを伴うが、心からの「ありがとう」という感謝の表現は、誰にとっても純粋な承認のメッセージとして受け止められる。ウェルビーイング研究の第一人者である前野隆司教授（慶應義塾大学大学院）の研究においても、幸福な人が持つ4つの特徴の一つとして「ありがとう因子（つながりと感謝）」が挙げられており、他者に貢献する利他的な姿勢を持つ人ほど幸福度が高いことが明らかにされている。これらの理論的知見を踏まえ、学校教育の中で「ありがとう」の声掛けがあふれる環境を意図的に構築することが、生徒の自己有用感を実感させ、将来的なウェルビーイングの実現につながると考えた。

（2）本校および地域・家庭の現状と課題

本校が位置する地域は近年の急激な住宅増加に伴い、県内でも類を見ない規模で生徒数が急増している。こうした地域の変化の一方で、多くの家庭が核家族かつ共働き世帯であり、保護者同士の横のつながりや地域コミュニティとの関係性がたいへん希薄になっているという課題を抱えている。さらに、近年の子どもたちの遊び方の変化も顕著であり、インターネットやSNSを介して直接顔を合わせずに遊ぶスタイルが定着した結果、保護者が我が子の友達をよく知らず、友達の保護者については全く分からないという状況が生じている。

今後、部活動の地域展開などが進むにつれて塾通い等の外部環境を利用する生徒が増加すると見込まれ、地域クラブへの不参加や家庭外活動の分散により、親同士・地域と家庭のつながりが一層希薄化することが強く懸念される。学校と地域、そして家庭が分断されることなく、生徒を取り巻く大人が一体となって子どもたちの育ちを支える関係性の再構築が急務となっていた。

（3）研究主題の設定とねらい

そこで本校では、教育活動全体の方針として「協調・利他」をキーワードに掲げ、学級経営や学年経営、学校行事、そして地域との協働場面において、生徒同士・教師と生徒・地域と生徒の間で「ありがとう」が自然かつ必然的に湧き上がる活動を意図的に仕かけることとした。特に、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の仕組みを積極的に活用し、学校内の活動にとどまらず、地域社会の課題解決やボランティア活動に生徒が主体的に参画する機会を創出することを目指した。地域や校内で他者から感謝され認められる体験を通して、生徒が自己有用感を実感し、確かな自尊感情を醸成するための学校運営の在り方を究明すべく、標記の研究主題を設定した。

2 研究仮説

「協調・利他」を重視した教育活動を推進するとともに、学校運営協議会を通して地域社会と密接に連携し、生徒が誰かの役に立ち「ありがとう」と感謝され認められる機会（ボランティア活動や地域貢献行事等）を意図的に設定・拡充していくならば、生徒は自他の価値を尊重してより良い人間関係を構築し、自己有用感を実感するとともに自尊感情を醸成させることができるであろう。

3 研究の内容と方法

（1）研究の内容

生徒の自己有用感を実感させ自尊感情を育む学校運営として、以下の 3 つの柱を設定し検証を行った。

①「協調・利他」を軸とした校内での感謝・承認文化の醸成：学校運営のキーワードや組織方針に「協調・利他」を掲げ、学級・学年経営や日常の授業・生活場面で生徒同士が互いの貢献を認め合い、感謝を伝え合う「ありがとう」の文化を醸成する。また、教員自身も生徒の価値や努力を承認する積極的な「ありがとう」の声掛けを行い、人間関係の質を高める。

② 学校運営協議会（CS）と連携した生徒ボランティア活動の再編と推進：生徒と地域の関係希薄化という課題を学校運営協議会で共有し、地域から学校へのボランティア要請を積極的に行ってもらう協力体制を構築する。従来の校内中心で軽微な作業にとどまっていたボランティア委員会の活動を再編し、地域社会の切実なニーズに多くの生徒が主体的に参画できる仕組みへと転換する。

③ 地域と協働する新たな地域貢献行事の創設と実践：学校運営協議会からの提案による地域の天然記念物「逆ダケ」の PR と地域活性化を目指した「竹灯籠イベント」の創設や、学年部（第 3 学年等）と地域が協働して企画・実施する「地域の子ども向けお祭り」など、相互に「ありがとう」が行き交う実践の場を具体化する。

（2）研究の方法

5 月に実施される全国学力学習状況調査（以下全国学調）の生徒質問紙と 11 月に実施される「新潟市生活・学習意識調査」（以下意識調査）のアンケート結果（集計データ）を用い、自校の各項目（肯定率・割合）の経年変化や全国・新潟市平均との比較分析を行う。具体的には、意識調査の「地域や学校で先生以外の大人からほめられたり認められたりしてうれしいと感じることがある」「やっていることを先生や友達に認められてうれしいと感じることがよくある」「先生は私のよいところを認めてくれている」等の意識項目の変化を検証する。また、全国学調の「自分には良いところがある」、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の 3 項目を重点項目として分析した。

さらに、生徒のボランティア参加状況、教員・生徒間の関係性の変化、地域住民からのフィードバック等を定性的に収集・分析し、研究仮説の妥当性を検証する。

4 研究の実際

（1）活動・運営テーマ名

テーマ名：「ありがとう」があふれる学校づくりと地域協働の学校運営の実践

（2）具体的な実践の展開

ア 研究の内容①に関して（校内における感謝と承認の文化醸成）：全校の経営方針に「協調・利他」を掲げ、学級経営・学年経営の中で「ありがとう」が日常的に自然と湧き上がる工夫を凝らした。特に教員側から生徒一人ひとりの頑張りや良さに目を向け、心からの「ありがとう」の言葉を意図的・積極的に掛け続けた。

イ 研究の内容②に関して（学校運営協議会との連携とボランティアの転換）：課題を学校運営協議会で共有し、「地域から学校へ積極的にボランティアの要請を出してほしい」と依頼した。従来、本校のボランティア委員会は校内の軽微な活動が中心であり、生徒間では「楽な委員会」と認知されていた。この意識を打破するため、地域からのボランティア依頼に多くの生徒が積極的に参加・貢献できるよう、全校的な呼びかけと組織的なマッチングを推進した。

ウ 研究の内容③に関して（地域協働行事の創設と交流の深化）：学校運営協議会での議論の中から、校区内にある市指定天然記念物「逆ダケ」の知名度低下と活用の難しさが課題として挙げられた。そこで協議会から「生徒の力を借りて竹灯籠イベントを開催したい」との提案があり、新たな地域行事が創設された。また、第３学年部においても「地域に貢献する新たな活動」の構築を模索し、地域の方々の協力を得ながら、地域の子どもたちを集めて楽しませる「地域お祭りイベント」を企画・実施した。

5 研究の成果と課題

（1） 研究の成果

ア 「新潟市生活・学習意識調査」の集計データより。（資料１参照）

単に%数値の傾向を見るにとどまらず、これらの変化が偶然ではない客観的成果であることを検証するため、自校生徒（N=791 名）と新潟市全体の中学校平均（N=15,873 名）および前年度自校数値との間で、独立性のカイ二乗検定（χ^2検定）および母比率の差の Z 検定（有意水準 5%）を実施した。統計解析の結果、以下の通り極めて高い信頼度で成果が裏付けられた。

① 校内承認感と師弟関係の劇的改善（Q12：95.7%、p=0.0324）：

「先生や友達に認められてうれしい」（Q12）では、最肯定「あてはまる」が 64.6%（市平均 61.7%）に達し、カイ二乗検定において p=0.0324 で市平均を有意に上回った。「ややあてはまる」を含めた肯定率は 95.7%に達し、教員からの積極的な「ありがとう」の声掛けや生徒相互の承認活動が、校内の強固な安心感と良好な関係性を構築した。

② CS 連携・地域協働行事による自己有用感の急伸（Q31：87.6%、前年比+6.6pt, <0.001）：

「地域や学校の大人から認められてうれしい」（Q31）の肯定率は 87.6%となり、前年度 81.0%から +6.6pt 急伸した（Z 検定：z=3.61, p<0.001）。特に第３学年では前年度 77.1%から今年度 88.8%へ+11.7pt と驚異的に上昇した。これは、学校運営協議会（CS）と連携したボランティア委員会のマッチング組

織への刷新、「逆ダケ」竹灯籠イベント、3学年部による地域お祭りイベントなど、地域住民と「ありがとう」を直接交わし合う実践が高学年ほど強く結実したことを示している。

③ 授業理解度・学習意欲およびキャリア意識への連動波及（Q57, Q54, Q13）：

校内および地域での豊かな承認体験は、教科授業や将来目標の形成にも大きく波及した。理科理解度（Q57：最肯定 50.3% vs 市 42.7%, +7.6pt, p<0.0001）や国語理解度（Q54：最肯定 49.2% vs 市 43.5%, +5.7pt, p=0.005）において市平均を極めて有意に凌駕した。さらに「将来の夢や就きたい仕事がある」（Q13）の肯定率は 70.1%（市平均 64.3%, p=0.0003）となり、自己有用感が生徒の自尊感情と将来への主体性を力強く引き出している。

④　同じ母集団を比較するため令和5年度の1年生が3年生になるまでを追跡し、縦断コホート分析を行った重点となる3項目において縦断コホート分析を行い確実な生徒の成長が確認された。

イ　「全国学力・学習状況調査」の集計データより。（資料２参照）

本調査分析は、生徒の学習意欲、自己肯定感、学校生活への適応感等の意識構造を客観的に把握し、学校教育活動の成果および今後の改善課題を統計学的に証明することを目的とする。文部科学省が実施する「全国学力・学習状況調査」の生徒質問紙調査データ（令和6年度～令和8年度）に基づき、上山中学校の回答分布を新潟県（公立）および全国（公立）の全体集計値と比較・検証した。

①　項目「自分には、よいところがあると思いますか」について

経年推移の検証：令和6年度(80.1%) ➔ 令和7年度(84.7%) ➔ 令和8年度(85.5%) と肯定率は連続して上昇（+5.4 ポイント増）。令和8年度には県平均（83.9%）および全国平均（84.0%）を上回る水準に達しており、統計的差は消失した。生徒の自尊感情が着実に向上・定着したプロセスが確認される。

②　項目「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」

令和6年度の課題：肯定率 86.3%であり、県平均(91.8%)および全国平均(90.4%)に対して統計的に有意に低く（対県 Z = -3.03, p = 0.0025 **; 対全国 Z = -2.09, p = 0.0367 *）、明確な低迷を示していた。学校全体の指導・肯定的な声かけ改善の取り組みにより、令和7年度には 94.4%まで跳ね上がり差を解消。さらに令和8年度には肯定率 95.3% に達し、全国平均（90.9%）を統計的に有意に上回る結果となった（Z = +2.36, p = 0.0185 *）。

③　項目③「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」について

3年間を通じて肯定率は 95.4% ➔ 97.6% ➔ 97.0% と極めて高い水準を維持している。県平均（96.1%～97.1%）および全国平均（95.2%～96.6%）と比較しても統計的有意差はなく（p > 0.10）、上山中学校生徒の健全な社会的貢献意欲と道徳的価値観が極めて高い次元で安定・定着していることが判明した。

（２）成果のまとめ

「地域や学校で先生以外の大人から認められてうれしい」と感じる生徒の割合（肯定率）が極めて有意となった。これは、ボランティア活動や「竹灯籠イベント」「地域お祭り」などの地域協働活動

を通じ、生徒が地域住民から直接「ありがとう」と感謝され肯定された体験が、確かな自己有用感として結実したことを示している。また、その結果「自分には、よいところがあると思いますか」の回答が確実に向上・定着した。

また、教員からの積極的な感謝・承認の声掛けにより「先生や友達に認められてうれしい」という数値も優位に高くなり、教員と生徒、生徒どうしの関係性がきわめて良好になったことが実証された。これらの地域からの評価も合わせ、他者からの肯定的な評価の積み重ねが、生徒一人ひとりの自尊感情の醸成と貢献意識の高揚へと確実につながっていると判断できる。

（2）今後の課題

① ボランティア活動の全校展開と定着：地域貢献活動やボランティア活動への生徒の参加率を一層高め、一部の意欲的な生徒だけでなく全校生徒が均等に自己有用感を実感できる機会のさらなる定着・拡充。

② 家庭・保護者間のコミュニティ形成への支援：核家族・共働き世帯の増加やネット依存等による保護者同士・地域の関係希薄化に対し、学校運営協議会を核としたさらなる保護者参画・地域コミュニティ活性化の支援策の構築。

③大規模校化に伴う校内・通学路の安全安心感の確保：質問 17「学校の安全安心感」において、最肯定「あてはまる」の割合は 49.8%（市平均 57.3%, -7.5pt, p=0.0005）と市平均を有意に下回った。急激な住宅増加による生徒数急増（大規模校化）や通学路の環境変化が生徒の安心感に影響していると考えられ、落ち着いた生活環境の整備と校区防災・防犯団体との連携強化が急務である。

引用・参考文献

(1) 国立教育政策研究所（2015）『生徒指導リーフ Leaf.18「自尊感情」？それとも「自己有用感」』初版。

(2) 前野隆司（2013）『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』講談社現代新書（慶應義塾大学 SDM 教授による幸福学・ウェルビーイング研究）。

(3) 新潟市教育委員会（2023～2025）『新潟市生活・学習意識調査（中学校用集計表）』。

(4) 文部科学省(2024～2026)　『全国学力学習状況調査･回答結果集計　［生徒質問］』